MieHerstory
News Letter No.23
三重の女性史研究会

三重の女性史研究会会報・第23号
2015年6月5日発行
編集：三重の女性史研究会事務局
〒514-1133津市久居万町638-2佐藤方
TEL&FAX　059－255－7813
✉ mie-her09@jewel.ocn.ne.jp
発行：三重の女性史研究会
〔年3回発行／不定期〕

～ 完成　ご報告いたします ～

# 『この凝縮の軌跡　鈴山雅子追悼集
## ―男女共同参画社会をめざして―』

鈴山雅子前会長が旅立たれてから、早いもので1年が過ぎようとしています。私たち三重の女性史研究会は、男女共同参画みえネットとともに、昨年9月11日「鈴山雅子さんを語る会」を実施し、引き続き「追悼集」の編集作業を行ってきました。この間、三重県男女共同参画センター「フレンテみえ」はじめ、皆さまにはいろいろとお世話になり有難うございました。

### 『この凝縮の軌跡』発刊

「鈴山雅子さんを語る会」（9月）終了時に、追悼集作成へのご協力をお願いして8ヶ月経過。多くの方々のご協力を得て、このほど上梓に漕ぎつけました。5月15日には、故人の1周忌を目前にご霊前にお供えし、20日には執筆者やご寄付くださった方々、関係機関や図書館、県外の女性史関係等々へ贈呈いたしました。

編集委員（9名）は、それぞれに持ち味を発揮、6回の会議を経て、三重の女性史・第二集作成時の資料となりうるようにと、内容に苦心いたしました。

第一章　足跡
第二章「鈴山雅子さんを語る会」記録
第三章　追悼文

多くの方々からのご寄付をはじめ、５３名にも及ぶ方から、追悼文が寄せられました。

皆様、県内の図書館で、この貴重な証言集を是非お読みください。

竹内　令（追悼集編集委員会代表）

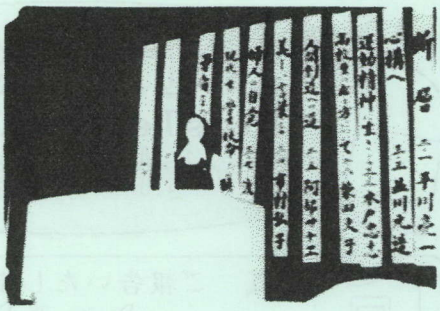
〔編集会議より 2015年3月21日／フレンテみえリサーチ室〕

6月7日（日）17：00よりフレンテみえ多目的ホールにて「鈴山さんへの報告会」を実施。

【23号の内容】『この凝縮の軌跡』発刊P１／聞き書き道場（第2回）「文化を通じて女性問題を見つめてきた・伊藤英子」P2～5／エッセイ『三重の女性史』を読み返す（7）最終回P6／日本医史学会参加記P7／春のパネル展・ミニ・フィールドワーク報告P8

聞き書き道場　No.２　伊藤　英子さん

聞き取り（2015年１月／５月）および各種文書より
聞き手：土屋 邦恵・木下 弓子　　文責：木下 弓子



八幡中央高校２年生、校内弁論大会にて

## 文化を通じて女性問題を見つめてきた　伊藤英子

### 文化的環境に恵まれて育った時代

１９３６（昭１１）年１月、広島県呉市に３人きょうだいの長女として生まれる。父、福原二郎は呉で神社の建築などにたずさわる父親を持ち、平壌医専（１期生）を出て医師となる。北九州・八幡製鉄病院の小児科医勤務医を務めながら九州大学で医学博士号を取得する。

戦後英子が高校生のときに八幡で開業した。母は主婦から、戦後は夫の開業に合わせ看護婦の資格を取り共稼ぎの体制をとる。経理も任され、実に生き生きと働いていたことが思い出されると英子は語る。この間、英子が小学校２年の時、軍医としてインドネシアに出征し同じ５年の時帰還している。英子は父の異動や疎開に伴い、呉・山口・西宮・八幡・尾道・因島など各地を転々として過ごした。その後、八幡中央高校から、地元の女子大などを進学先として考えていたとき、父親が東京への進学を強く勧めてくれ、早稲田大学教育学部国語国文科に進む。結婚を契機に三重に住み続けることになるが、三重の動きや姿についてどこか冷静に第３者的目線で見るところがあるのは、この様に各地で過ごしたためかもしれないと英子は言う。

幼少期から、よく読書をした。当時はルビのある本が多く大人の本や講談本をはじめ山本有三・モーパッサン・ジイド・吉屋信子等々、そして中原淳一の雑誌「ひまわり」も。八幡製鉄の企業城下町だった八幡は当時勢いあり、「レニングラード交響楽団」（現サントペテルブルグ交響楽団）などの来日公演もあり、自宅ではレコードでベートーベンを聞くなど文化的環境に恵まれていた。ジャン・コクトーの映画「美女と野獣」に魅せられたのもこの頃である。中学２年には演劇部に入りルパシカを着て演じた「トルストイ」が学内の演劇コンクールで優勝したのも思い出に残る出来事だった。この頃から当時盛んだった新劇などの演劇集団との出会いもあった。このような環境の中で過ごしたことが、後の文化的活動の原点になったと思われる。

英子のアルバムの中で印象的な写真がある。高校２年生の時、学内の弁論大会に出場した時のものである。演壇に立つ彼女の背後には「現代に生きる学生の使命」「人間創造への道」「婦人の自覚」など戦後民主主義の息吹を感じる手書きの垂れ幕が下がっている。そして英子の選んだタイトルは「女性解放の行方」だった。女性も自分の意志で人生を選ぶ重要性を語り、４位に入賞し電気スタンドを賞品に得たことを覚えている。この弁論大会では自分の文章の最後に「女性は優しさが必要と」書き加えさせられ、進取の思想にブレーキをかける大人の世界がそこにもあったが・・・。この写真に象徴されるように、「男女同権」などの言葉とともに「戦後民主主義」の思想が自分のバックボーンになっていると英子は言う。もちろん憲法にこの条項を盛り込んだ立役者がベアテだったとは知る由もなかったが。

高校では生徒会長に立候補を勧められ立つ。２百何十票を得たが、会長になることはかなわなかった。後に三重で多くの団体の委員や長を引き受けることになるが、この頃から「新しいことにチャレンジ」「なんでも受けて立つ」「受けた以上は責任を持って引き受ける」という精神は変わっていないと英子は言う。

大学時代は、青春を謳歌しいわゆるノンポリとして過ごした４年間だった。アルバイトはしたことがなく、２年生まではテニス部。演劇に関心を持ち、浅利慶太の石神井時代の「劇団四季」や、

木下順二が主宰する「ぶどうの会」など研修生募集に臨んだりした。そして日吉にあった「劇団炎座」に研究生として入団する（しばらくしてどこか肌に合わないことがわかり退団）。当時は滝沢修や宇野重吉の演劇が一世を風靡していた時代。「演劇」はこの時代の文化の先端を切っていた時代であった。

演劇だけでなく、名曲喫茶やジャズ喫茶はたまたシャンソンの「銀巴里」などにも通った。また、当時はよほど裕福なものしか持たなかった運転免許を取得したのも学生時代だった。

同級生には、山田太一や寺山修司（一年で病気の長期入院のため中退）がいた。こうした恵まれた東京での経験はのちに三重で、子どもたちに本物を見せたいと「津子ども劇場」設立に奔走したことや、その縁から１９８４（昭５９）年の設立にかかわった「津文化協会」の行事に山田太一を呼ぶなどの活動に十分生かされることになる。

卒業後は、ちょうど就職難の時代でもあり、一旦親許の八幡に帰る。しかし２３歳の時キャリアを得ていた友人の勧めもあって東京の「ヤンズレモン」（「ポッカレモン」より古いレモンエキス製造会社）の就職試験を受け入社が決まる。ところがあれだけ東京での大学進学を後押ししてくれた父親をはじめ周りが就職に大反対。教員免許もあったが教師になることも賛成されなかった。泣く泣く帰省して、その後はいわゆる花嫁修業として、琴・いけばな（小原流）・茶道・料理・洋裁・和裁などを学ぶこととなる。英子は言う「この就職断念は私の一生の中での最大の挫折だった」と。しかし、この時代のいけばな技術の習得が、のちに述べる活動のスタートを切り、花開くことになる。

## 津で花開いた文化活動・男女共同参画活動

１９６２（昭３７）年伊藤達雄（１９３２（昭７）年生まれ。現「都市環境ゼミナール」会長、三重大学名誉教授ー地理学）と結婚。同年、達雄が三重大学助手になるに伴い１９６３（昭３８）年から三重にかかわることに。結婚するとき、研究生活に没頭することを最優先した夫からは「『べったり奥さん』になるな。『これ』というものを持って、エキスパートになってほしい」といわれる。この言葉と、就職断念の挫折をどこかで挽回したい気持ちを心の奥底に持ち続けながら、結婚と同時期には小原流家元教授になり、後に津中日文化センターの講師となる。

１９７７（昭５２）年劇団プークが伊勢にあるのに津にはないとオルグに来たことがきっかけで「津子ども劇場」（現・津子ども NPO センター）の創設に参加、初代運営委員長となる。第一回目の公演が「エルマーの冒険」だった。一時期は１８００名の会員を擁する組織となった。その後も代表委員など経てこの活動を通算１８年間務める。この活動に関わった大義は、先にも述べた通り「子どもたちに生の演技、舞台を見せてやりたい」ということだったが、この時の内なる気持は「これなら、私が学んできたことを生かすことができる！やっと一人前になれる！」ことだったとミニコミ誌『すぎな通信』Vol.60（2007 年・豊吉晴子発行）の取材で語っている。当時はちょうど子育て中でもあった。現在も「子どもにいい時代を」そして子どもの虐待や格差がない世の中であってほしいと願っている。この活動を契機に１９８６（昭６１）年には津市文化振興審議委員、１９９０（平成２）年に三重県立美術館「三重の子どもたち展」実行委員を務めることになる。

また英子５５歳の１９９１（平成３）年、当時婦人対策監をしていた鈴山雅子が発案した三重県で活動する女性を集めるべく公募した「第１回みえ女性文化祭」に、創作生け花いけばなグループ「花つどい」を結成し応募し、実行委員長となる。これが、津さらに三重県の女性の活動をとりまとめて活躍するスタートとなった。ついで１９９５（平成７）年三重県女性センター〔現　三重県男女共同参画センター「フレンテみえ」〕のオープン時には、この新しい施設の高い天井まで届く大型モニュメントー津市の錫杖湖で拾ってきた流木に仲間の染織家が染めた布を絡ませそこに花を活

け込んだものーを作り上げ大成功をおさめる。もし英子が大学卒業後就職していたら定年の時期にあたるころから、過去の挫折を挽回するべく、怒涛のように女性関係の行事に関わりその責任者となってゆく。以下にそのころからの活動を年代順に列挙してみる。

1995年　創作したモニュメントの前で

1993（平成５）年

・第１回津市女性のつどい「まほろば」実行委員会委員長。

1994(平成６）年

・第２回津市女性のつどい「まほろば」実行委員会委員長。

・三重県女性の海外派遣事業「第３回アイリスの翼」に参加。

1995(平成７）年

・三重県女性センターオープン事業「第１回女性フェスティバル」初代実行委員会委員長。以後は、実行委員または企画運営委員として参加。

・「みえウイメンズ・プラン」を結成して代表となる。(現在に至る)
ここでは、「ジェンダーチェックリストを作成。日常生活編・若者編・あなたらしさ私らしさ編・子どもたち編を作成。三重県はもちろん韓国・全国に発信普及に努めている。

・三重県女性センター運営協議会委員に就任。(平成９年まで)

・津市の女性による「まほろばネットワーク」結成、平成11年まで代表。

・津市「女性の海外派遣事業」第４回国連世界女性会議北京 NGO フォーラム及び友好都市鎮江市派遣団「アゼレア・TSU」団長。

1999(平成11）年

・「日本女性会議2000津」実行委員会副実行委員長。～2001年３月

・「三重県男女共同参画推進条例に県民の意見を反映させる会」発起人。

・津市男女共同参画懇話会委員（津市男女共同参画推進条例検討委員）～平成14年３月

・日本まんなか共和国女性サミット参加事業三重実行委員会実行委員長

2002(平成14）年

・旧津市男女共同参画審議会委員。～平成18年３月

・三重県男女共同参画センター企画運営サポーター就任。～平成27年３月

・男女共同参画フォーラム実行委員会委員長。(津市主催)

2006(平成18）年

・津市男女共同参画懇話会委員。

2007(平成19）年

・津市男女共同参画審議委員。～平成20年６月

・三重の女性史調査研究会研究員。

左より伊藤英子、鈴山雅子、松本侑壬子（映画評論家）2008年６月７日フレンテみえにて

2008(平成20）年

・「男女共同参画みえネット立ち上げ会」世話人。

2009(平成21）年

・日本まんなか共和国男女共同参画研究・交流会～滋賀～、三重県民間代表。

・実践プログラム「パパを狙い撃ち」(三重県男女共同参画室主催／ヌエック指導)

2011(平成23）年

・男女共同参画みえネット世話人代表就任。平成23年度NPO等からの協働事業を受け、新しい公共の場づくりのためのモデル事業「意思決定の場への女性の参画」促進応援プラン～寄ってたかって男女共同参画を活かしたまちづくり～実施。

以上の女性関係の活動は先に惜しまれながら亡くなった鈴山雅子と二人三脚ともいえる行動が多

い。「彼女の企画でこちらが動き、こちらの企画を彼女が実現させてきた。」と英子は語る。彼女から得たものの大きさを「鈴山雅子追悼集『この凝縮の軌跡』」で語っている。これ以外に、「子ども」「映画」「文化」「演劇」をキーワードとする三重県下の活動、例えば「岡田文化財団」の評議員、「三重県子どもＮＰＯサポートセンター」監事のほか、２００３（平成１５）年以来「小津安二郎生誕１００年記念三重映画フェスティバル」副実行委員長を務めている。また三重県内男女共同参画連携映画祭におけるファシリテーターとして初回より10年近くかかわってきた。小津安二郎は三重・松阪出身であるが、それだけが理由でない。彼の作品は家族の問題、特に現代の問題と重なる「核家族」「ひとり親」「老夫婦」などのテーマが取り上げられており、そこに惹かれると英子は言う。最近では２０１４（平成２６）年に「小津安二郎記念碑建立委員会」の委員も務める。また、映画祭のファシリテーターとして嬉しいことは、川越・朝日町や伊賀市、四日市市などが、地域に根差した映画祭を成功させてきていることと語る。

これまで多くの団体や活動の委員・委員長として、しかも長期にわたり関わり続けてきたのは何故という質問に「やりがいと責任感でそれぞれの任を果たしてきた」そして「トップを務めたのちも、次には『手をたたいて』応援するサポーターとして下から支援する側に回っているつもり」と答えた。

若きときの挫折を振り切り今なお全力で女性の味方になり、リーダーシップを発揮し続けている英子である。

伊藤英子さんの聞き書きを終えて

木下　弓子

伊藤・土屋・木下と共に北九州市に縁がある聞き書きチームだった。伊藤さんがエレガントにリーダーシップをとる姿の秘密を理解できたし、「チャンスは貯金できない」のとおり、時々のチャンスを逃さずにきた人生と感じた。現在も忙しく責任ある役目を果たしておられるが、先ごろの心臓疾患で倒れたような事が無いよう過ごしていただきたい。

【顧問：伊藤康子先生からの講評】

伊藤英子さんはどういう方なのでしょうか。多芸多才、自己の表現活動も、文化活動の取りまとめも、行政との連携も、社会への貢献も、生活の中に織り込んで、周囲の方から信頼され、責任を果してくださる安心感の大きな方。

表題が「文化を通じて女性問題を見つめてきた」とあるのは、かなり微妙な表現です。活動歴を見ると「見つめてきた」より深入りしていると思われるからです。

聞き手は、高校で生徒会長に立候補をすすめられるとは、どのような生徒だったのか、踏み込んでいません。大学生活はのびのびと自由にお金も使える理解が親にはあったのに、就職に絶対反対されたのはなぜか、従ったのはなぜか、「花嫁修業」に明け暮れたのはなぜか、踏み込んでいません。結婚した時、夫の言葉は紹介されていますが、妻はどう考えたのか、どう実行したのか、踏み込んでいません。その後の活動に、例えば生の演劇を子どもにという活動や、小津安二郎への共感に、これらの内容が反映されているように思えます。伊藤英子さんの意志にふんわりと真綿がかぶせられた聞き書きです。

何でも踏み込むのが良い聞き書きとも言えません。

あらためて、1930年代生まれの女性の生活史にとって、「家族」や「地域社会」は重いテーマだと考えさせられます。

〔伊藤康子〕

## エッセイ　『三重の女性史』を読み返す（7）

### 私は21世紀が信じられる

竹内　令

『三重の女性史』第一編（通史）第三章（「平等・開発・平和」の追求）には、国際婦人年以降の国連と日本の女性施策、そして三重県の女性行政の進展が述べられ、続いて、男女共同参画社会推進のために「三重県男女共同参画推進条例」が制定されたこと、その進展をめざす行事が市町村へと広げられていく様子が、新聞記事等を引用して述べられている。またその進展に伴う意識の変化が、調査をもとに、数値を出して語られている。

この第三章で通史は締めくくられるのであるが、その最終行には、2000（平成12）年に津市で行われた「第17回日本女性会議」の宣言

—男女市民・企業・行政が行動を起こして男女共同参画社会を実現するよう、女性は方針決定の場に進み、男性は、家庭や地域活動に参加する—

を取り上げ、このように結んでいる。

「三重の女性は、21世紀の先に見通した社会を実現できるだろうか」と。

さて、5月末刊行の『鈴山雅子追悼集』は、まさにこの、通史・第三章を肉付ける部分であり、昭和から平成へと進む中で、大変革の今を生きる三重の女性と男性が、男女共同参画社会を目指す流れの中で何に出会い、誰と出会い、何を想い、何を感じ、何を成したかが語られている。予想どおり、まさに証言集となったのである。

そして私は先日、その進展を証明する1つの場面に出くわした。

3月28日（土）午後、津市リージョンプラザの1室、ある講演会での出来事。

演題は「気象と市民生活」。講師は三重大学大学院教授のT氏。3，4歳の可愛らしい女児を連れての講義であった。「今日は家庭の事情で」と。

会場からは拍手が沸き起こった。かの幼女は、ちょこなんと、そして静かに座り続ける。当たり前の如くに。

講義半ばにお連れ合いが登場して、また拍手が会場にこだました。

多くの人々が努力を重ねながら目指してきた社会が、また、鈴山雅子さんが女性教授方と共に、三重大学で種を蒔かれた努力が、花を咲かせ始めていたのだ。21世紀が信じられる！　私は嬉しかった。

（4月末　記）

「エッセイ『三重の女性史』を読み返す」は今回にて終了します。
次の企画をご期待ください。

## 第116回　日本医史学会総会・学術大会　参加記

佐藤　ゆかり

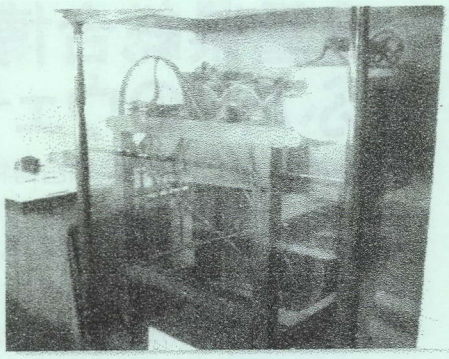
4月25・26日に大阪で開催された「第116回　日本医史学会総会・学術大会」に参加した。

今年は「1927年における津市立病院の女性医師採用」という演題を持っていった。以前より、戦前の東京女子医専『女醫界』や『日本女医会雑誌』に津市立病院の記述が多いことが気になっていた。それは女医の募集であったり名簿の所属病院欄であったり。今日存在しないその病院（とその当時は思っていた）に、何故そんなに女医がいたのか、必要だったのか。疑問を突きとめるべく調べていった。すると1927年女性医師は46.7%、これは戦況厳しい1944年の37.5%よりも割合が高かった。これは2012年の全国値19.6%よりも、2020年30%の目標よりも、はるかに高い数値である。・・・と現代の問題と対比して発表を行ったら、発表後の討論が女性医師や女子医学生が多いことへの弊害（あえての傍点）に終始してしまい、いろいろな意味で、まだまだ修業が必要と実感した発表となってしまった。〔詳しくは『日本医史学雑誌　第61巻第1号（第116回日本医史学会学術大会 抄録号）』2015年3月発行をご覧ください。〕

けれど今回この参加記のヤマは、そこではない。学会の会場となったのが日本綿業倶楽部「綿業会館」だったのである。これもまた恥ずかしながら大した予備知識もなく、行ってみて驚いた。国の重要文化財にも指定されているこの歴史的建造物は、三重県ゆかりの建物だった。正面入ってすぐのきらびやかな広いロビーのつきあたりに大きな銅像がある。その横の銅板によれば、この人物は岡常夫といい、三重紡績から東洋紡績の専務取締役となったが昭和2年病没。その妻である安子が遺志を継ぎ100万円余を寄付。それをもとに建てられたのがこの綿業会館だったのである。

吹き抜けとなっている2階の回廊には様々な展示品があり、三重紡績から東洋紡績、その他多くの紡績会社が日本の綿糸工業を推進してきたことがうかがえる。しかし反面、この豪華な建造物は、三重の、また日本各地の、さらには朝鮮から連れて来られた女性・少女達の労働搾取なしには完成しなかったことも事実である。私は複雑な思いの中、2日間を過ごしたのだった。

＊　＊　＊



ところで次の発表は10月9～11日の「第12回全国女性史研究交流のつどいin 岩手」。労働・保育の分科会で、奇しくも「女子工員への仏教統制―明治末期～大正初期の三重紡績津分工場―」について発表する予定だ。（「あなたの専門はなに？」のツッコミは承知の上）今回の経験を生かし、より確かな調査・研究を発信していきたいと思う。

# 「4月10日は何の日？」

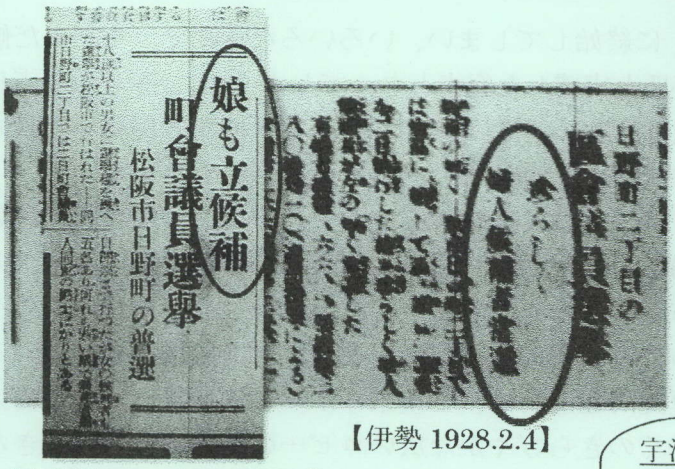
## ～フレンテ春のパネル展2015を開催しました～

４月１日～30日、三重県男女共同参画センター「フレンテみえ」エントランスにて、三重の女性史研究会恒例「フレンテ春のパネル展 2015」を開催しました。1946年４月10日、日本で初めて女性が参政権を行使したことにちなみ、「女性と政治」をテーマに毎年新たな情報をお届けしています。

たしかに国政選挙や県・市町村議員の選挙については、女性の参政権は戦後でしたが、戦前から日本の女性は、様々な意思決定の場に対して、選挙権・被選挙権を要求し、実際に選挙権・被選挙権を行使もしていました。その三重県内外の事例を１か月にわたってご紹介しました。

神都商工會議所
一級議員選擧
棄權者わづかに
六十九名の好成績

【大阪朝日三重 1928.10.28】
写真は投票を終え出てくる女性か。


娘も立候補
町會議員選擧
松阪市日野町の普選

【伊勢 1928.2.4】

【大阪朝日三重 1928.2.3】

日野二丁目区会議員選挙
今回の調査で「連記投票」であったことがわかりました。

宇治山田商工会議所で議員選挙実施
有権者は１級175名・２級869人、女性も選挙権が与えられました。２級選挙は５名連記、村本ふさ、今村とら等44名の女性有権者も投票を行いました。夫の代理人として女性が投票することも認められました。

ミニフィールドワークに出かけました

## 三重県総合博物館MieMu「ふたりのウェディング事情」

３月４日（木）、三重県総合博物館 MieMu（みえむ）へ春のミニ・フィールドワークに出かけました。学芸員の門口実代さんの案内で、三重の結婚に関する過去～現在をじっくり見学しました。さまざまな婚姻届や受け継がれる嫁入り道具など、民俗学と女性史の接点を堪能しました。

今流行の「顔はめパネル」で記念撮影しました♡